親待の若手シリーズ

私にも言わせて！ 第123回

宮古島と新型コロナと私

人口5万6千人ほどの宮古島の保健所長となって2年。新型コロナ台風の日々でした。私の様子と南の島の新型コロナ状況について書いてみたいと思います。

惑惑（ワクワク）の転職

10年ほど泌尿器科の臨床医でしたが、ローテーション先の研究機関が楽しく40歳を機に、すったもんだの末に研究職に転職したものの、たばこを一緒にやめたのがよくなかったのか、すったもんだが終息せず、行政医師として働くことに。不惑ならぬ〝惑惑〟の四十路でした。詳細は話せないことが多く、この誌面ではご容赦ください。

正直、保健所は募集があるから転職候補にしてみたというところでした。ただ当時の上司が、あきれもせずに人生相談を親身に聞いてくれ、なぜか保健所を勧めてくれたこと、行政に転職した先輩からも話を聞いたことが、自分の中でランク上昇につながりました。問題は離島募集という点のみでしたので、妻に相談したところ、あっさりと了承されました。ただ、食い付き気味に「単身赴任ね！」との返答でしたが（笑）。こんな感じで宮古島保健所勤務を決めました。

最初から新採用研修をすべて受け（させられ）ました。40すぎの転職おじさんが、20代の若者と研修を受けるのは、修行そのものでしたが、行政の基本を学ぶことができました。臨床から転職の場合、とても重要だと思います。新採用研修を受けるべきとした当時の保健総括には感謝しています。のんびりと学びながら、臨床から足を洗い、行政職に溶け込んでいきました。今思えば、かわいいもの？ですが、エボラ出血熱発生に備え、県代表として東京まで何回か研修を受け（に行かされ）、訓練や研修講師（をさせられたり）と、頑張ったなと思うところもあります。また、プライベートで好きな釣りを再開できる最高の環境であったのも耐えられた要因でした。単身赴任問題を乗り越える決め手とは口が裂けてもいえませんが（笑）。

保健所長になってしまった

宮古島3年間の後、本島南部で主任医師として勤務する中、県内で99名の患者が出る麻疹流行がありました。年度初めで感染症担当は私1人の期間があり、電話番から検体搬送までこなす状況を経験しました。仲良くなれるのか？と思いながらも医療機関、本庁、自治体との連携を覚える良い機会ともなりました。

次に本島中部で班長として2年間勤務しました。各保健所長の定年日を知るようになり、次は自分が（?!）やらなければいけないのかと、（周囲の？）不安を感じるようになっていた矢先、新型コロナが始まりました。第2波レベルで80連勤し、過酷さを身をもって知り、持続可能な体制にせねばと、（医師的にはほどほどに）そこに注力しました。流行が加速する中、保健所長が足りない年を迎えました。「なるようになれ」と「辞められないよなぁ」という気持ちで自分なりに腹をくくりました。宮古保健所は想定内でしたが、もう1つの離島保健所と3か月の兼任辞令は想定外でした。県内初だそうです。なんとかなるでしょと思うしかない感じで保健所長になりました。管理職手当等は1所属分で、時間外手当ありのころより給料減を知った5月、覚悟も染まる宮古ブルーになりました。

南の島の新型コロナ

管轄は1市1村で人口は5万6千人ほどです。2020年7月、新型コロナの初発例から2022年9月の届け出限定化までの2年ほどで2万77名の届け出がありました。最大は第7波の夏で人口10万人対2500人を超えました。人員50名余りで対応しました。この時点で宮古の罹患率は約35％、全国17％、沖縄県34％で、宮古は全国の約2倍、県よりは少し多い状況でした。

波ごとでは、第3波（2021年1～2月従来株）251人、第4波（同年4～6月アルファ株）443人、第5波（同年7～10月デルタ株）973人、第6波（2022年1～3月オミクロンBA1株）2013人、第7波の春（同年3～6月オミクロンBA2株）5855人、第7波の夏（同年6～9月オミクロンBA5株）1万688人でした。第4波は第3波の2倍、第5波は4倍、第6波は8倍、第7波の春は23倍、第7波の夏は43倍です。物や金より人が大切だとつくづく分かりました。

宮古地域の入院率は4・6％で、60歳以上14％、60歳未満2・4％でした。波ごとでは、3波が42・6％と最も高く、4波32・1％、5波18・7％、6波10・8％、7波の春1・7％、7波の夏は1・6％と低下しました。宮古地域の死亡率は0・19％でした。沖縄県0・14％、全国0・21％で、全国平均よりは少ない状況です（宮古は県内一の高齢化地域）。年齢別では、60歳以上の死亡率は0・95％、60歳未満0・02％でした。波ごとでは、3波3・98％、4波0・23％、5波0・1％、6波0・2％、7波の春0・07％と減少するも、7波の夏は0・18％と上昇しました。医療崩壊の問題ではなく、患者数増大とワクチン効果減弱により高齢者集団の防御力を超えてしまったからだと思います。7波の夏における60歳以上の死亡率は0・75％、60歳未満は0・02％でした。インフルエンザの死亡率は、60歳以上0・55％、60歳未満0・01％といわれますので、新型コロナはまだ、インフルより少し危険といえるかもしれません。

医療機関・高齢者施設等での発生数は600を超え、宮古地域には500前後あるので、全施設が新型コロナを経験したともいえます。疑いを含むクラスター率は3波12・5％で、4波12・5％、5波7・1％、6波12・0％、7波の春6・8％、7波の夏15・5％でした。クラスター率は、ワクチン効果減弱のある波では高くなる傾向があるように見えました。

検査数を比較すると、7波8月の宮古地域は10万人当たり1200件／日、本島は600件／日ほどで、本島の2倍でした。保険診療分は確認できなかったものの、行政検査（保健所、一般無料検査、接触者センター等）の陽性率は、宮古14・9％で本島15・3％とほぼ同じでした。疫学調査が十分行えていたのは5波までですが、宮古地域の推定感染場所は、県全体と比較し会食（21％ vs 16％）と接待を伴う飲食（13％ vs 4％）の割合が高かったです。

特に困ったことは、情報共有、人員確保、検査体制でした。医療機関、医師会、市村の担当者との週1回ミーティング、地元マスコミの取材、他県機関と仲良く、県対策本部に参加し離島アピールを行うなどして、少しは解決に貢献できたと思います。職員には大変恵まれました。運が良かったとしかいいようがありません。

私事と仕事

そういう年頃でしょう、ですが、今年は両親の健康問題が連発したり、自身の糖尿病のクスリ断ちができたと思ったら緑内障を指摘されたり…。釣りは超不調で涙にくれ、YouTubeの釣りコンテンツを見ては毒づいていましたが、緑内障と診断されたとたん、80㎝超えのハタとフエフキを釣り上げたり、ルアー釣り自己記録を連発したり。開高健の「漂えど沈まず」が座右の銘で、「人間万事塞翁（さいおう）が馬」の人生です。私事もできるこの仕事に感謝していて、恩に報いていきたいと思います。なお、沖縄県は行政医師不足です。ご興味のある方はぜひ！

沖縄県宮古保健所長
木村 太一

平成11年琉球大学医学部卒業後、同大学泌尿器科医局入局。医療機関・研究機関に勤務。26年4月に入庁。行政医師として沖縄県宮古島の宮古保健所に勤務。本島保健所で主任医師、班長を経て、令和3年4月から現職（同年7月まで石垣島の八重山保健所長を兼任）。